

『鎧と十字架』(二)

二・荷風におけるフランス文学の受容

現代ならさしずめ大学を卒業して社会人としての第一歩を踏み出す年齢である二十二歳になって、永井荷風が「こゝに意を決し志を改めて仏蘭西語稽古にと暁星学校の夜学に通ひ始め」(『書かかでもの記』)て、フランス語の学習に向かった直接の原因は何であろうか。第一高等学校に不合格になった後、流行作家の門下生、落語家の弟子、歌舞伎座の狂言作者見習い、雑誌記者と、自分の生き場所を求め職業遍歴を重ねた果てに、新たな飛躍を目指して何かの手掛かりになればと新天地に飛び込んだことは間違いない。それにしても英語でなく仏語を選択した理由はなぜであろう。荷風にとって漢学から英語に転じてアメリカの大学に留学し官界のエリート道を進んだ父親の生き方を見れば、骨身にしみて英語の重要性を認識していたはずである。明治時代において数ある外国語の中でも英語の重要度は群を抜いている。それを誰よりもよく自覚していたのは

浅原義雄

荷風自身であることは、『父の恩』で書かれている次の言葉でも証明できる。

この当時吾々書生の間に仏蘭西の事に対して趣味を持つてゐるものは殆ど絶無と云つてもよかつたでせう。東洋に於ける英米の商業的勢力の膨張に従つて、日本の社会での栄達の糸口となるべきものは英語より外にはなかつたからです⁽¹⁾。

社会での立身出世や栄達の糸口に英語を学習する状況は百年経つた現在でも全く変わらず、日本では英語一辺倒である。いや、むしろコンピューターが普及した現在のほうが一段とその状態が進化しているかもしれない。しかし、日本で英語の比重が極端に高くなつたのはそれほど古くはなくこの百五十年ぐらいのものである。江戸幕府末期頃にはヨーロッパ諸国の力関係から、オランダ語が江戸幕府の中心的存在から外れて英語、仏語に比重が移つていったのは自

然の成り行きであった。歴史的に見れば、日本でフランスが導入された時期は英語と同時期である。江戸末期にフランスが徳川幕府に肩入れた事情から、文久元年（一八六一）には蕃書調所で仏語が教育されている。戊辰戦争で幕府が瓦解して薩長を中心とした新政府が樹立されたために、薩摩藩を支援していたイギリスの母語である英語が仏語に取って代わったのは当然の結果であった。

明治時代の初頭から英語が諸外国語のなかで如何に圧倒的な優位に立っていたか、下村富士男著『明治初年条約改正史の研究』の明治四年九月現在「各国留学生調」を見れば一目瞭然である⁽²⁾。それによれば官費・県費・自費を合計して英国百七名、米国九十八名、ロシア八名、フランス十四名、ドイツ四十一名、ベルギー三名、オランダ一名、清国七名、その他二名となっている。長崎出島の通辞を介して欧米の唯一の外国語であったオランダ語の衰退ぶりは、徳川政権の諸制度をすべて否定した明治新政府の意向によるとはいえずに値する。この流れで見れば徳川方に付いたフランスへの人気の高さも納得できる。明治初期のフランス留学希望者の数は、英米二百五名に対して十四名と僅か十三%強である。ドイツと比して三分の一でしかない。このことは梅溪昇著『お雇外国人（概説）』の明治七年お雇外国人教師官庁別・国籍別一覧を見れば、米国四十七名、英国二百六十九名、仏国百八名、独国三十七名、その他四十二名でも証明される⁽³⁾。意外にフランス人教師が多いが、これは元治元年（一八六四）年に幕府が駐日フランス公使レオン・ロツシユ

の建議を容れて建設した横須賀製鉄所を、そのまま新政府が受け継いだためであろう。それでも英米に対して三分の一の数でしかない。

政治の表舞台では需要のほとんど無かった仏語も文学の世界では話は別である。英米の作家に遜色なくフランスの作家もロシアの作家と同様に人気を博している。人気の高さではフランスの作家が群を抜いているかもしれない。ここで外国文学が明治三十年代までに日本においてどのように翻訳されたかその状況を見てみよう。風間書房版国立国会図書館編『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』によれば、明治元年のヂオスコリデス著『全世界未来記』に始まって、明治四年には一世を風靡した中村敬宇訳によるスマイルスの『西国立志編』とゴープルの『自由之理』が翻訳されている。明治十年代は当時のベストセラーともいべきジュール・ベルヌ著川島忠之助訳『新説八十日間世界一周』を手始めに、スウィフト、スコット、デュマ等の数多くの冒険物に混じって、ラムの人生訓物や自由民権運動に多大な影響を与えたルソーの作品が眼に付く。二十年代になると、トルストイやツルゲーネフのロシア物やシェイクスピアやモリエールの戯曲など翻訳も多岐にわたり数が増えてくる。三十年代になると、翻訳文学の最高傑作と称される森鷗外訳によるアンゼルスンの『即興詩人』を皮切りに、モーパッサンとゾラの作品が圧倒的に多くなる。これらの翻訳の変遷は、明治期の文学事情と物の見事に軌を一にしていることは論をまたない。

フランスの作家は日本の自然主義の作家に多大な影響を与えたこ

とは周知の事実で、尾崎紅葉におけるモリエール、小杉天外におけるモーパッサンとゾラの影響等は夙に知られている。そのなかでも永井荷風のフランス作家に関する知識は、赤瀬雅子・志保田努著『永井荷風の読書遍歴書誌学的研究』を一覧すれば実に多岐にわたっている。明治期だけでも荷風のフランス作家の読書遍歴は、ゾラ、コペ、ゴンクール、サルドウ、シャトウブリアン、ドーデ、レオン、アナトール・フランス、ブールジュ、プレヴォー、フローベール、ポール、モーパッサン、モリエール、ユゴー、ルメートル、レニエ、エドワール、ロスタン、ロチ、バレス、エルピュー、ヴェルレーヌ、タイヤード、マルドリユス、ノアイユ、ボードレル、ミュツセ、モレアス、ラマルチヌ、ルソー、サルドー、スクリブ、ゴーチエ、バタージュ、バザン、ブールジェ、コメール、ダクル、ドーデ、ゴンクール、ゲエスヴィエ、ジュブ、モレラ、ヴェラーレン、ヴォーグとまことに多彩である。これを見ても荷風におけるフランスの作家への傾倒ぶりは群を抜いている。とりわけ荷風が傾倒したのは、エミール・ゾラとギー・ド・モーパッサンに尽きるだろう。

このような社会状況の中で荷風がフランス語の習得を思い立ったのは、外国語学校支那語科に名ばかり在籍して学校には行かず芝居や寄席に足繁く通った挙げ句、明治三十一年荷風十九歳の時、『簾の月』と題する草稿を携えて、廣津柳浪の門を叩いたのが遠因となっている。その頃の荷風は交友会雑誌「桐陰会雑誌」に、家族で上海旅行した思い出を下敷きにした『上海紀行』を投稿したり、数編

の習作をものにして心に期すものがあつてか、プロの小説家に弟子入りして本格的に文学修行をしたい気持ちを抱きつつあつた。荷風が廣津柳浪に弟子入りしたのは、『小説作法』で述べている次の言葉の實踐に他ならない。

初學者もし小説にでも書いて見たらと思ひつく事ありたらばまづその思ふがまゝにすら／＼と書いて見るがよし而して後添刪推敲してまづ短篇小説十篇長篇小説二篇ほどは小手調筆ならしと思ひて公にする勿れその中自分にも一番よしと思ふものを取り丁寧に清書してもし私淑する先輩あらばつてを求めて其の人のもとに至り教を乞ふべし⁽⁴⁾

数ある小説家の中で「作家は紅葉露伴の門下たるにあらずんば殆ど其の述作を公にするの道」(『書かかでの記』)がなかつた時代に、永井荷風が廣津柳浪を選んだのは後年彼自身が『書かかでの記』で述懐しているが如く體質的に柳浪の小説が肌にあつたのは確かであらう。

余は其頃最も熱心なる柳浪先生の崇拜者なりき。今戸心中、黒蜥蜴、河内屋、龜さん等の諸作は余の愛讀して措く能はざりしものにして余は當時紅葉眉山露伴諸家の雅俗文よりも遙に柳浪先生が對話體の小説を好みしなり⁽⁵⁾。

言葉からも証明できる。

廣津柳浪門下生となった荷風は泉鏡花が尾崎紅葉のもとで修行したのと同じように、翌年から彼も廣津柳浪名義で『三重櫻』、自身と師匠の合作名義で『薄衣』と『夕せみ』、小ゆめや雨笛のペンネームで『花籠』、『かたわれ月』等と文学修行に研鑽する。その間に清国人羅臥雲の紹介で巖谷小波主宰の木曜会の会員にもなる。永井荷風にとって木曜会の会員になったことはその後の人生を決める上で重要な契機となる。木曜会の会員には黒田湖山、生田葵山、西村渚山等、外国文学に造詣の深い文士が綺羅星の如くいた。彼等の外国文学への該博な知識は、荷風に知らず知らずのうちに多大な影響を与えたようである。その間の事情は『吾が思想の変遷』で詳しく述べられている。

する中に何うしても其儘では満足出来なくなつて、初めて外国文学を味ひたいと思ふやうになつた。それには当時巖谷小波氏の木曜会に出席し、生田葵山、黒田湖山両君から頻りに外国文学の趣を説き聞かされのが、与つて甚だ力があつた⁽⁶⁾。

ただ人の話を聞いただけの耳学問だけでは、フランス文学やその他の外国文学の理解にも自ずと限界がある。やはり、自ら自覚して積極的に学ぶ姿勢がなければ知識は深まらない。荷風は当時の文芸雑誌や翻訳物で最新の知識を得ていたことは、『書かでもの記』の

わが身をして深く西歐の風景文物にあこがれしめしは、かの即興詩人月草かげ草の如き森先生が著書とまた最近海外文藝論の如き上田先生が著述との感化に外ならざればなり。わが身の始めてポオドレエルが詩集悪の華のいかなあるものかを知りしは上田先生の太陽臨時増刊『十九世紀』といふものに物せられし近世仏蘭西文學史によりてなりき⁽⁷⁾。

荷風の外国の作家への関心は、『吾が思想の変遷』で述べているように、「ゲーテ若しくはシエークスピアの如き古典の方には更に眼を向けなかつた」ばかりでなく、「プーシキンとツルゲネーフとを読んで見たが、全体から云つて、田舎臭いように思われて」、「何うしてもフランス物ほどには興味を惹かなかつた」のが本音である。だが仏文学を原文で理解するほどに仏語の知識がなかつた荷風は、翻訳や英語の原書からその知識を得ていたのが実情である。しかし、そのことが荷風の文学者としての道を決定づけてしまうゾラとの出会いや、仏語学習に繋がるのである。

で先づ鷗外先生の翻訳から読んで見た。水沫集などだ。其の意味は十分了解らなかつたにも拘らず、本当の文藝と云ふものは、当時我が国で盛大であつた硯友社一派の小説よりも、西洋

の作品のやうなものでなければならぬと云ふやうな気がして来た。而して分らないながらも、原文に就いて外国文学を味ひたいと云ふ考が頻りに働いて来た。

で最初には先づ多少英語の智識があつたから、ジヨージ・エリオットとホーソンを読んで見たが、水沫集などで窺つた大陸文学の様な趣味が無いのと、又一つには語学の力も十分でなかつたので期待した程の面白味は感ずる事が出来なかつた。所が其の後何心なくゾラの英訳を繙いて見ると、これは訳文も読み易く、又ゾラが旧文藝に対するあの雄々しい反抗の態度が、非常に自分の性情に適したやうに思はれた。で一冊、又一冊、殆どゾラを通読して了つた⁽⁸⁾。

荷風自身、外国語の学習は漢文修行の延長ぐらゐに考えていた節があるが、いずれにしても文学者として生きていくには漢文と外国語の智識が必要不可欠と判断していたきらいがある。そのことは『小説作法』の次の一文をしても明瞭である。

わが日本の文化は今も昔も先進大國の摸倣によりて成れるものなり江戸時代の師範は支那なり。明治大正の世の師とする所は西洋なり。然れば漢文歐文そのいづれかを知らざれば世に立難し。兩方とも出来れば虎に翼あるが如し国文はさして要なければも若しこれを知らんとせば矢張漢文一通の知識必要なり本

店の内幕知れば支店の事はすぐわかるの道理大正現代の文学は其の源一から十まで悉く西洋近世の文学に在り⁽⁹⁾。

荷風は小説家として一本立ちするには漢文の外に欧州語として仏語を本格的に学ばなければならぬと一念発起したのである。それにはフランス人に直に学ぶのが一番と考へた。荷風はフランス語の学習も芸事の修行も同じで立派な先生に指導を受けなければ身に付かないと考へていたのは面白い。

小説か、んと思はゞ何がさて置き一日も早く仏蘭西語を學びたまへ。但し手ほどきは日本人についてなす事禁物なり。曉星學校の夜學にでも行き其の國人についてなすべし。何事も手ほどきが肝腎なり。踊三味線などもくだらなき師匠にきて手ほどきしたるものはいやな癖つき其後はいかなる名人の弟子となるとも一度つきたる癖は一生直らぬものなりとぞ。日本人の兎角語學に不得手なるやうに云はるゝは中學校にて日本の教師に英語の手ほどきされるが爲なるべし。小學中學の恐るべきはこれだけにても知らるゝなり⁽¹⁰⁾。

この文章は外国語を教えている教員にとつては耳の痛い言葉だが、日本人の外国語学習における永遠の課題点をズバリと指摘している。この問題は百年経つた現在でも依然として解決はしていない。

さらに次の言葉は外国語を学ぶ学生の動機の一つをももの見事に表現している。

そもそも、私がフランス語を学ぼうと云ふ心掛けを起しましたのは、あゝ、モーパッサン先生よ。先生の文章を英語によらずして、原文のままに味ひたいと思つたからです。一字一句でも、先生が手づからお書きになつた文字を、わが舌自らで、発音したいと思つたからです⁽¹¹⁾。

この文章は語学を学ぶ人間の金言である。翻訳に頼らずに直に原文に接するのは理想的であるが、語学の壁が大きく立ちはだかつて万人がそう容易に修得できるものではない。荷風に漢文の素養があつたことは仏語学習に大きな支えとなつてゐる。つきるところ漢文も仏語も語学の学習にvarietyはない。荷風の漢文修行は、漢詩人でもあつた父親に漢詩の作法を学んだ後、文部省の官吏であつた岩溪裳川に日曜毎に三體詩の講義を聴いて本格的に学習してゐる。荷風の文学的旅立ちには、この漢文の素養を下地にして「成島柳北の漢文混りの戯文」(『吾が思想の変遷』)の模倣から始まつて、「小説を書き出したのは、別に誰から感化を受けたと云ふでもなく、自分の幼い時の経験を唯漫然と書き連ねて見たのが最初である」(『吾が思想の変遷』)ことから出発してゐる。荷風は文学上の次なる仕上げとして仏語を選択したのである。

ところで荷風の仏語力はどの程度の物であつたらうか。荷風が率直に告白しているように基本的な仏語文法をマスターした程度の段階であることは間違いない。

米国へ向つて、日本を出ました頃には、やつとフランス文法の一通りを終へたばかりでしたから、私は、彼の地へ上陸しましても、英語なぞは顧みず、すぐフランス語の教師を取りました。私は上陸後二年程たつても、アメリカ人の会話を聞き取る事が出来ませんでした。其の代り先生のお書きになつたもの、中で、ごく読み易いものは、字書によつて、どうかこうか分るやうになりました⁽¹²⁾。

仏語文法を一通りマスターできれば、荷風の文才なら仏文の講読は辞書さえあればどうか可能である。「小説家たらんとするものは辞典と首引にて差支なければ一日も早くアンドレージドの小説をよむやうに」(『小説作法』)、ゾラの本書に向かつてのは事実である。

荷風が最初に心酔するのはゾラである。ゾラを持つ文学的體質が荷風の文学的思想とよくマッチしたためであろう。そのことは次の言葉が証明してゐる。

ゾラが舊文藝に對するあの雄々しい反抗の態度が、非常に自

分の性幕に適したやうに思はれた。で一冊、また一冊、殆どゾラを通讀して了つた。其の頃の思想は敢て私一個人のみでなく、世間一體が舊思想に對して反抗の聲を擧げてゐた。外國の作家でもゾラの外にゴルキー、ニーチェなど始めて紹介されたのは、矢張り此の當時だから、私なども外國文學と云つてもゲーテ若しくはシェークスピアの如き古典の方には更に眼を向けなかつた。従つて其の頃の私の作品と云へば、凡てゾラの模倣であつて、人生の暗黒面を實際に觀察して、其の報告書を作ると云ふ事が、小説の中心要素たるべきものと思つて居た⁽¹³⁾。

暁星の夜学校でフランス語を学んでから、荷風が父の勧めで米國に留学を決意し、日本郵船信濃丸の船上の人となつて横浜港を出港したのは明治三十六年九月二十二日であつた。それまでの間に荷風が書いた作品は、明治三十五年に『野心』(四月)、『闇の叫び』(六月)、『地獄の花』(九月)、『新任知事』(十月)、明治三十六年に『夢の女』(五月)、『夜の心』(七月)、『燈火の巷』(七月)である。これらの作品はいずれも何らかの形でゾラの影響を受けているとあまたの批評家によつて指摘されている。そのうちゾラ關係の著作には、『ゾラ氏の故郷』(明治三十五年四月五日「饒舌」)、『ゾラ氏の作 La Bête Humaine』(明治三十五年七月五日「饒舌」)、『ゾラ氏の「傑作」を読む』(明治三十六年六月五日「饒舌」)、『エミール・ゾラと其の小説』(明治三十六年九月)、『ナナ』の抄訳『女優ナナ』

(明治三十六年九月)、ゾラの短編の翻訳『大洪水』(明治三十六年九月)である。永井荷風の作品にゾラの名前が初めて出てくるのは、『桜の水』という初期作品の中においてである。

○「え、小説の趣向屋で御座い、仏國はゾラ流写實的の珍種露國はトルストイ張りの憂鬱種を始めとして、何でもお好み次第小説の趣向珍種は如何様ア引」⁽¹⁴⁾。

荷風がゾラを写実主義の作家と見なしているのは興味深い。また荷風は『地獄の花』の最後で、ゾラの「実験小説論」に刺激されて人間の暗面を研究し祖先の遺伝と環境から生じる情念を描写したいと述べている。

人類の一面は確かに動物的たるをまぬがれざるなり。此れ其の組織せらるゝ、肉體の生理的誘惑となさんか。將た動物より進化し來れる祖先の遺伝となさんか。そはともあれ、人類は自ら其の習慣と情実とによりて宗教と道德を形造るに及び、久しく修養を経たる現在の生活に於いてはこの暗面を全き罪惡として名付けるに至れり。斯く定められたる事情の上に此の暗黒なる動物性は猶如何なる進行をなさんとするか。若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば、余は先づ此の暗面に向つて特別な研究を為さざる可からずと信するなり。そは実に、正義の

光を得んとする法庭に於て、必ず犯罪の證跡と其の顛末とを、好んで精査するの必要あるに等しからずや。されば余は専ら、祖先の遺伝と境遇に伴う暗黒なる幾多の慾情、腕力、暴行等の事実を憚りなく活写せんと欲す。「地獄の花」の一篇、又此の目的に対して企つる所、しかも不幸にもあが藝術は全き自由を許されざるなり。加ふるに、未だ猶ほ、其の研究の極めて不完全なる、思想の甚だ浅薄なる、描写の常に未熟なる、遂に其の予期せし所の半ばをだに現す事能はざりき。然れども、同情ある読者よ、無謀なる此の年少の作者が、其の鈍き才能の如何を顧みず、新に企てし大胆なる研究に対して、永く多大の教示を惜しむ勿からん事を、此れ著者の切望する所なり⁽¹⁵⁾。

しかし、この一節は『エミール・ゾラと其の小説』で述べている次の文章の實踐に他ならない。

此の間彼は新に又一小説を創作せり。乃ちThérèse Raquin (女主人公の名)と題せるものにして、「アルチスト」なる一新聞の紙上に掲載したる後、一八六七年一卷となして出版せしが、此の一編は姦通、殺人等、人生の最暗黒面に向つて試みたる深刻緻密の描写によりて成功し、いよいよ彼が名を高からしめぬ⁽¹⁶⁾。

「姦通、殺人等、人生の最暗黒面に向つて試みたる深刻緻密の描写」は、荷風の師である廣津柳浪の作品『今戸心中』や『河内屋』等の世界の理論的裏付けを求めたにすぎないと言える。ゾラの描いた小説は人生そのものを活写しており、既成の文学とは一線を画した普遍的な生命力があると信じたのであろう。

小説は生きてたる人生の一片なり。此の活きたる文学を形造らんとせば必ずや或る点まで実験科学の力を借らざる可からざるや云ふを待たず。余は單純に人類の行動を以て聖靈の如何に原因するとなし、人類その物を形造る肉体の生理的作用を忘れたる旧き文学に対しては、全く満足し能はざると共に、ゾラ氏が描ける活きたる文学は永遠に崇拜すべき価値ありと信ずるなり⁽¹⁷⁾。

人生の暗黒面に向かつて永遠に冷静な觀察者の眼を持つことは、江戸文化にどっぷり浸かつて育つた情緒的な人間である荷風にとつて體質的に合わなかつたことは間違いない。荷風がゾラから学んだのは小説に自然描写を取り入れることであつたのではないだろうか。その一例として荷風が翻訳した『ゾラ氏の故郷』の一節を見よう。

実に晴明かなる月なるよ！ 雨と云ふ日は一日もなし。色変

らず藍色なる太空は聊かの雲にだも汚されぬ縹子のやうなる光沢を示すなり。紅の水晶とも見えて昇る日は、聽て黄金の塵を撒きたる如き雲の中に沈む。されど海風は絶えず日に伴はれて吹き続くが故に、熱さ覚ゆる事もなく、また風の日と共に吹き止むとも、夜は昼の中に集まりたる爽かなる氣の発散すれば、極めて心地よく冷かに、香ひある植物の薫りは芬々として漂ひ渡るなり。国は秀麗にして、水湾の左右よりは岩石の腕突出し遙かなる嶋嶼は眼界を限るが如く見ゆ。天地好ければ、海は唯だ広大なる一個の水盤にして、濃き綠色の湖に外ならず、遠き山の麓にはマルセイユMarseillesの人家低き岡に攀れり。空氣の澄み渡るに及びては、人はレスタックL'Estaqueよりして灰色したるJolietteジョリエットの埠頭と其湊に漂ふ船の小さき帆柱、其の彼方には、樹間に隠見する家と、白く空に輝くNotre-Dame-de-La-Gardeラガルドの礼拝堂を臨むべし屈曲したる海岸線のレスタックに及ぶに先立ちて、広き区画を作りたる処には、製造所の烟、間断ある雲をたなびかせり。太陽の眼界に沈む時、其の白き色の黄く褐色に移るふ左右の岩多き海角の間に、海は殆ど黒ずみて眠り行くやうに見ゆれば、松の樹も同じく後の赤き土に対して青黒き梢をしめす。かの眩く熱き日と共に消え去る東の空の閃きは、唯是れ、限りもなき一面の大画パノラマなるを。

されども、レスタックはこの海の外に猶幾多の眺めをそなへたり。山の方に這ひ行く村には、切り碎きたる岩間を廻る道相

通ず。マルセイユと里昂Lyon間の鉄道線路は此等の岩間を過ぎ、谷に架けたる橋を横切り、小丘の下に延長しては、ラネルトLa Nertheの隧道と呼ばれて、四哩程なる仏蘭西第一の長き隧道をつくる。それ、幾多の岡の間に凹みたる此等の峽間と、絶壁の麓を廻る狭き此等の小径と、只だ松のみ生えし荒廢せる此等の山と、恰も血と鏽なぞにて染め付けられたらん色して高く聳ゆる要塞なぞ、荒茫として而も莊大なる此の如き光景は、決して他に見るべくもあらず。狭き路は時に豁然と広がるあり。谷の低地には畑ありて橄欖の樹苦し氣に成長し、淋しき一つ家のその屋根は白ばみ、その窓は戸ばそを閉ざしたり。かゝる様に續きては、凹凸限りなき小道と、切開くべくもあらぬ荆棘の茂り、顛りたる岩石や、水涸れ果てし谷川の流れ——人をして只満目荒涼たるに呆れ果てしむ。かくて、この万象を蔽ひ松の黒き茂りの上に、天はたゞ渺乎として恰も衣の如き藍色に横ふなり。

岩と海との間の海岸には、狭き一帯の土地ありて、其の赤き土には大きな幾個の穴を掘付けぬ。瓦造る爲めにして、この地方の重立ちたる工業なりとか。地は至る処に裂け破れて、辛くも病みほ、けたる四五本の樹に支へられたる有様は、怒れるもの、呼吸にて焼け焦がされたるかと思ゆ。道は漆灰の床の如く歩む毎に行く人の脚蹠を埋め、垣の辺りよりはそよと吹く風の動きにも砂烟立ちまがふなり。小さき蜥蜴は熱して竈の如

き光沢を帯びたる壁の上に眠り、蝗は枯れ乾きたる草の中より雲の如く起る。この眠れる如き南方の静けくも又重ねなる空気の中には、単調なる蟬の鳴く音より外、又一ツとして活きたる世の面影と云ふものなかりしなり⁽¹⁸⁾。

ゾラの英訳から翻訳したと言われているこの一節は、和語・漢語・原語を巧みに駆使したなかなかの訳文となっている。荷風の人生の師である森鷗外の『即興詩人』の手法に近いが、後の名作『すみだ川』の一節を十分に予感させる翻訳となっているのは間違いない。

月の出が夜ごとおそくなるにつれてその光は段々冴えて来た。河風の湿ッぽさが次第に強く感じられて来て浴衣の肌がいやに薄寒くなった。月はやがて人の起きている頃にはもう昇らなくなつた。空には朝も昼過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲は重なり合つて絶えず動いているので、時としては僅かにその間々に殊更らしく色の濃い青空の残りを見せて置きながら、空一面に覆い冠さる。すると気候は恐ろしく蒸暑くなつて来て、自然と浸み出る脂汗が不愉快に人の肌をねばねばさせるが、しかしまた、そういう時にはきまつて、その強弱とその方向が定まらない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んではまた降りつづく事がある。この風やこの雨には一

種特別の底深い力が含まれていて、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、場末につづく貧しい板屋根に、春や夏には決して聞かれないう音響を伝える。日が恐ろしく早く暮れてしまっただけ、長い夜はすぐに寂々と更け渡つて来て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮られてよくは聞こえない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時の如く静にしてしまう。蟋蟀の声はいそがしい。燈火の色はいやに澄む。秋。ああ秋だ⁽¹⁹⁾。

ゾラの自然描写を荷風独自の自然観に裏付けされた世界に変貌させるには、外遊して冷徹な目を養い血のにじむような修練を経なければならぬのである。

(続く)

注

- (1) 「全集」第十卷百十六頁。
- (2) 日本英学史学会編『英学事始』、エンサイクロペディアブリタニカ、二百二十二頁。
- (3) 日本英学史学会編『英学事始』、エンサイクロペディアブリタニカ、二百一頁。
- (4) 「全集」第十四卷二百六十七頁。
- (5) 「全集」第十三卷三百一頁。
- (6) 「全集」第六卷三百七十一頁。

- (7) 「全集」第十三卷三百十頁。
(8) 「全集」第六卷三百七十二頁。
(9) 「全集」第十四卷二百六十五頁。
(10) 「全集」第十四卷二百七十頁。
(11) 「全集」第五卷二百二十五頁。
(12) 「全集」第五卷二百二十五頁。
(13) 「全集」第六卷三百七十二頁。
(14) 「全集」第一卷二百七十頁。
(15) 「全集」第二卷二百二十一頁。
(16) 「全集」第二卷四百三十五頁。
(17) 「全集」第二卷二百八十四頁。
(18) 「全集」第二卷二百七十七頁。
(19) 「全集」第六卷百七十五頁。